

令和 2 年度病虫害発生予察予報第 4 号（7 月）

令和 2 年 7 月 7 日
高知県病虫害防除所

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生面積※
水稲(早期稲)	いもち病(穂いもち) ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ セジロウンカ 斑点米カメムシ類	<u>多(中央、中西)</u> 、やや少(東、西) <u>多(中央、中西、西)</u> 、やや少(東) <u>多(中西、西)</u> 、 <u>やや多(中央)</u> 、やや少(東) <u>多(西)</u> 、 <u>やや多(中西)</u> 、やや少(東、中央) <u>多(県下全域)</u>
水稲(普通期稲)	いもち病(葉いもち) ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ セジロウンカ	<u>多(中央)</u> 、やや少(東、中西、西) <u>多(中央)</u> 、やや少(東、中西、西) <u>多(中央)</u> 、やや少(東、中西、西) <u>多(西)</u> 、 <u>平年並(中央)</u> 、やや少(東、中西)
かんきつ類(温州みかん)	そうか病 黒点病 ミカンハダニ	<u>多(中央)</u> <u>多(中央)</u> <u>やや多(中央)</u>
かんきつ類(中晩柑類)	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ	<u>多(東、西)</u> 、少(中央、中西) <u>多(中央、中西)</u> 、やや少(東、西) <u>多(中央)</u> 、 <u>平年並(中西)</u> 、少(東、西) <u>多(東、中西)</u> 、 <u>平年並(中央)</u> 、少(西)

※ () 内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部
県東部：安芸市、室戸市および安芸郡の町村
県中央部：高知市、南国市、香美市、香南市、長岡郡・土佐郡の町村、
吾川郡いの町および高岡郡日高村
県中西部：土佐市、須崎市、高岡郡(日高村を除く) 町村および吾川郡仁淀川町
県西部：四万十市、宿毛市、土佐清水市および幡多郡の町村

I 気象予報（高松地方気象台 7 月 2 日発表）

＜予想される向こう 1 か月の天候＞ 7 月 4 日から 8 月 3 日

期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう 1 ヶ月の平均気温は、高い確率 60% です。

週別の気温は、1 週目は、平年並の確率 50% です。2 週目は、高い確率 60% です。3 ～ 4 週目は、高い確率 50% です。

＜向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

期間	対象地域	要素	低い(少ない)		平年並	高い(多い)
1 ヶ月	四国地方	気温	10	30	60	
		降水量	30		40	30
		日照時間	30		30	40

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

期間	対象地域	低い		平年並	高い
1 週目	四国地方	20	50		30
2 週目		10	30	60	
3 ～ 4 週目		20	30	50	

＜予報の対象期間＞

1 ヶ月： 7 月 4 日（土）～ 8 月 3 日（月）

1 週目： 7 月 4 日（土）～ 7 月 10 日（金）

2 週目： 7 月 11 日（土）～ 7 月 17 日（金）

3 ～ 4 週目： 7 月 18 日（土）～ 7 月 31 日（金）

II 病虫害発生予想

1 早期稲の病虫害

1) いもち病（穂いもち）

発生量：多（中央部、中西部）、やや少（東部、西部）

根 拠

(1) 6 月の調査では、県下全域で発生がみられ、発生面積は県中央部、中西部で平年よりも多く、東部、西部で少なかった。また、発生程度は東部、中央部、中西部で平年並、西部で低く、病斑は各地域ともに停止型が主であった。

(2) 7 月前半は、曇雨天の日が多いと予想されていることから、いもち病の発生には好適な条件であり、発生は増加するものと考えられる。

(3) BLASTAM（葉いもち発生予測システム）では、県東部では 6 月 19 日を最後に感染好適日が確認されていないが、6 月 26 日に県中央部、中西部、6 月 30 日に西部、7 月 1 日に中西部、西部で感染好適日が確認されている。早期稲の出穂は 6 月 4 半旬から始まっており、県中央部、中西部を中心に葉いもちから穂いもちへの移行が予想される（BLASTAMによる葉いもち発生予測判定状況は病虫害防除所HPを参照）。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、QoI剤の使用回数は作期を通じて1回とする。

2) ツマグロヨコバイ

発生量：多（中央部、中西部、西部）、やや少（東部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県下全域で発生がみられ、発生面積は県中央部、中西部、西部で平年よりも多く、東部で少なかった。また、発生程度は県下全域で平年並であった。
- (2) 7月の気温は平年よりも高く、7月の後半は晴れの日が多いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加するものと考えられる。

対 策

- (1) 近年、本虫が媒介する萎縮病の発生はほとんどみられていないが、出穂期から登熟期にかけて高密度になると実入りが悪くなることがあるので、その場合は他の病害虫とあわせて防除を行う。

3) ヒメトビウンカ

発生量：多（中西部、西部）、やや多（中央部）、やや少（東部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県下全域で発生がみられ、発生面積は県中西部、西部で平年よりも多く、中央部で平年並、東部で少なかった。また、発生程度は西部で平年よりも高く、中央部、中西部で平年並、東部で低かった。
- (2) 7月の気温は平年よりも高く、7月の後半は晴れの日が多いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加するものと考えられる。

対 策

- (1) 本県では、本虫の媒介する縞葉枯病がほとんど発生していないことや高密度になることもほとんど無いため、本虫のみを対象とした薬剤防除の必要性は低い。

4) セジロウンカ

発生量：多（西部）、やや多（中西部）、やや少（東部、中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部を除く地域で発生がみられた。発生面積は、県西部で平年よりも多く、中西部で平年並、中央部では少なかった。発生程度は、中西部、西部で平年並、中央部で低かった。
- (2) 7月の気温は平年よりも高く、7月の後半は晴れの日が多いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加するものと考えられる。また、未発生地域も発生がみられるようになると考えられる。

対 策

- (1) セジロウンカはトビイロウンカ、コブノメイガ同様、中国大陸等から飛来する害虫であるため、ほ場内での発生に注意する。多飛来があった場合など、高密度になった場合には薬剤防除を行う。

5) 斑点米カメムシ類

発生量：多（県下全域）

根 拠

- (1) 6月中旬のアザミウマ類のすくい取り調査時(出穂前)に、多くの地点でクモヘリカメムシ、ホソハリカメムシなどが捕獲されている。

対 策

- (1) 出穂期以降にカメムシ類の発生がわずかでも見られる場合、斑点米の発生が予想されるので、穂揃期及びその7～10日後に防除する。
- (2) ミナミアオカメムシの発生が見られる場合は、合成ピレスロイド剤の効果が劣るので、他系統の剤（ネオニコチノイド剤等）を用いる。

2 普通期稲の病害虫

1) いもち病（葉いもち）

発生量：多（中央部）、やや少（東部、中西部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部を除く地域で発生が見られた。発生面積は、中央部で平年よりも多く、中西部、西部では少なかった。発生程度は、中央部で平年並、中西部で平年よりもやや低く、西部で低かった。病斑は各地域ともに停止型が主であった。
- (2) 7月前半は、曇雨天の日が多いと予想されていることから、いもち病の発生には好適な条件であり、発生は増加するものと考えられる。
- (3) BLASTAM（葉いもち発生予測システム）では、6月26日に中央部、中西部、6月30日に西部、7月1日に中央部、中西部、西部で感染好適日が確認されている（BLASTAMによる葉いもち発生予測判定状況は病害虫防除所HPを参照）。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、QoI剤の使用回数は作期を通じて1回とする。
- (3) 窒素過多は発病を助長するので、穂肥等の施用は生育状況を見ながら適切に行う。

2) ツマグロヨコバイ

発生量：多（中央部）、やや少（東部、中西部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部を除く地域で発生が見られた。発生面積は、中央部で平年よりも多く、中西部、西部で少なかった。発生程度は、中央部、西部で平年よりもやや低く、中西部で低かった。
- (2) 7月の気温は平年よりも高く、7月の後半は晴れの日が多いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加するものと考えられる。また、未発生地域も発生がみられるようになると考えられる。

対 策

- (1) 近年、本虫が媒介する萎縮病の発生はほとんどみられていないが、出穂期から登熟期にかけて高密度になると実入りが悪くなることがあるので、その場合は他の病害虫とあわせて防除を行う。

3) ヒメトビウンカ

発生量：多（中央部）、やや少（東部、中西部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県中央部のみで発生がみられ、発生面積は、平年よりも多かったが、発生程度は平年並であった。
- (2) 7月の気温は平年よりも高く、7月の後半は晴れの日が多いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加するものと考えられる。また、未発生地域も発生がみられるようになると考えられる。

対 策

- (1) 本県では、本虫の媒介する縞葉枯病がほとんど発生していないことや高密度になることもほとんど無いため、本虫のみを対象とした薬剤防除の必要性は低い。

4) セジロウンカ

発生量：多（西部）、平年並（中央部）、やや少（東部、中西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部を除く地域で発生が見られた。発生面積は、県西部で平年よりもやや多く、中央部でやや少なく、中西部で少なかった。発生程度は、各地域ともに平年並であった。
- (2) 7月の気温は平年よりも高く、7月の後半は晴れの日が多いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加するものと考えられる。また、未発生地域も発生がみられるようになると考えられる。

対 策

- (1) セジロウンカはトビイロウンカ、コブノメイガ同様、中国大陸等から飛来する害虫であるため、ほ場内での発生に注意する。多飛来があった場合には、産卵痕や吸汁により生育被害が出る可能性があるため、薬剤防除を行う。

3 カンキツ（温州みかん）の病害虫

1) そうか病

発生量：多（中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、発生面積は平年よりも多かったが、発病程度は平年並であった。
- (2) 7月前半は曇雨天の日が多く、降水量は平年並と予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 幼木や発生の多い園地では黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

発生量：多（中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、発生面積は平年よりも多かったが、発病程度は平年並であった。
- (2) 7月前半は曇雨天の日が多く、降水量は平年並と予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生をできるだけ少なくするように管理する。
- (2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) ミカンハダニ

発生量：やや多（中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、発生面積は平年よりもやや多かったが、発生程度は平年よりも低かった。
- (2) 7月の気温は高めと予想されており、本虫は高温期には増殖が緩慢となることから増加は少なく、現在の状況が続くと考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

4 カンキツ（中晩柑類）の病害虫

1) そうか病

発生量：多（東部、西部）、少（中央部、中西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部のポンカンや西部のユズなどで発生が見られ、両地域ともに発生面積は平年に比べ多かった。
- (2) 7月前半は曇雨天の日が多く、降水量は平年並と予想されていることから、感受性の品種を中心に発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 幼木や発生の多い園地では黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

発生量：多（中央部、中西部）、やや少（東部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部を除く地域で発生がみられ、発生面積は中央部、中西部で平年よりも多く、西部で少なかった。また、発生程度は各地域ともに平年並であった。

(2) 7月前半は曇雨天の日が多く、降水量は平年並と予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

(1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生をできるだけ少なくするように管理する。

(2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) かいよう病

発生量：多（中央部）、平年並（中西部）、少（東部、西部）

根 拠

(1) 6月の調査では、県中央部の文旦、中西部のポンカン、西部の文旦で発生が見られ、発生面積は中央部で平年より多く、中西部で平年並、西部で少なかった。また、発生程度は各地域とも平年並以下であった。

(2) 7月前半は曇雨天の日が多く、降水量は平年並と予想されていることから、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢は剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

発生量：多（東部、中西部）、平年並（中央部）、少（西部）

根 拠

(1) 6月の調査では、県下全域で発生が見られた。発生面積は県東部、中西部で平年よりも多く、中央部で平年並、西部で少なかった。発生程度は、各地域ともに平年並以下であった。

(2) 7月の気温は高めと予想されており、本虫は高温期には増殖が緩慢となることから増加は少なく、現在の状況が続くと考えられる。

対 策

(1) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

農作物の病虫害防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病虫害防除所ホームページ（こうち農業ネット）

- ① 病虫害発生予察月報、病虫害発生予察予報
- ② 病虫害発生予察注意報、病虫害発生予察警報、病虫害発生予察特殊報
- ③ 病虫害発生予察技術資料
- ④ 新しく問題となっている病虫害 etc.